

Biwako 24hours

夏の夜明け 5:00 am

まだ静まりかえった世界のなか

太陽が起きはじめて湖を照らす。

湖畔をすつと通り抜ける風は

天然のクーラーのように涼しく

夜明け前からびわ湖の漁に出かける

漁師たちの暑さをいやす。

はるか昔から変わらぬ美しい光景が

今も、これからも続いていく。

自然とともに
生まるしあわせ、
このまちならではの
魅力や味わい、

湖西エリアに
たどりついたり組の
移住者たちそれぞれの
自分らしい暮らしを
お伝えします。

01

移住者 インタビュー

リターン
湖西→京都/名古屋/福岡→湖西

食でつながる地域の環 雄大な森に抱かれる暮らし



石塚卓郎さん、千歳さん
(イカリアシタ)

卓郎さんは建築、千歳さんは塾講師。夫妻は京都府京都市で育ち、京都府立総合技術学院を卒業後、各地の企業に転職しての転居を積り、千歳さんは結婚で出会った住友不動産の転居募集企画「住友のついで」に参加。2023年秋、卓郎さんが住友の転居募集企画「オーペル・ジュマンのジュマン」に参加。

都市部から帰ってきて
この地の豊かさを再発見

生まれ育った東京圏にかわりらしい北関東人
住宅を建て、家族でさまざまな毎日を楽しむ様
子さん。ここに落ちつきと、とくに遊び戻りたい
という気持ちはなかったといいます。
料理人の感性を磨くためには、先で最高級のもの
に触れるのも大切だから。で、都内にいた頃
妻がたまにオーペル・ジュマンのシェフ兼塾の
記事を見つけて、それをきっかけに、今まで培って
きた経験や技術を応用で表現してみるのもいいな
と思ふようになった(卓郎さん)



隣に住む卓郎さんのご両親がプレゼントしてくれた道具
で遊ぶ子どもたち。以前はマンション暮らしで外遊びを
する機会も少なかったそうですが、「子どもたちが活動的
になったのもうれしい変化です」と目を細める卓郎さん。



子育てが少し落ち着いたから事務の仕事も再開しよう
と、派遣会社に登録している千歳さん。「型固まり
なら事務職の募集もあり、さらに京都までいくと
仕事の見つけやすさも広がります」。湖西エリア
周辺で就職したい人にとっても心強い情報です。

「ちょうど家を建たないと考えていた時期で、
夫がメゾン訪めたら、お互い馴染みのある
場所に家をつくり、長女の小学校入学にも
間に合うといういろんな条件が重なったのも
大きいです(千歳さん)
ただ、都市部での暮らしに比べて、「不便に
なるのでは」という心配はあったとか
千歳さんは妊娠だったため、産婦人科が
近くにないことも不安のひとつでした。
「それが実際住んでみると思ったほど不便
ではなくて。産田の産婦人科までは車で
約15分、スーパーも同じくらいの距離で
いくつかがあります。JR湖西線に乗って
しまえば京都・大阪へ行くのもスムーズ
です(千歳さん)」

でも不自由はさせません。僕は生胡麻など入手
しづらいスパイスをネットで購入させてい
ます(卓郎さん)
メゾンのシンプになった卓郎さんがいま
手ごめらしているのは、地産地消のイタリアン
子ども向けの近づくいる両生が栽培する
オガニツタの近江野菜に、びわ湖の豊原な
ミララネで育った淡水魚、隠岐産土壌
で育まれた生江や江崎水産、豊かな食材
が揃います。そんな旬の美味しさを生かす
ことで、「自分の料が1段、2段シンプアップ
したように感じます。福ワてきて、改めて
この地の価値に気づきました」と卓郎さん
強調。生産者の畑や市場、道の駅まで地元
食料を探す。今まではなかったような食材に
も挑戦したいと意識気な千歳さん。食と暮らし、
人が人がつなぐ。地域にまた新しい魅力が
生まれているようです。

私たちの楽しみかた

- 夏は毎日の湖へ、足だけつけて水遊びしたり、湖畔や水中の小さな生き物を観察したり。湖にはクワガタもいないし虫もないので子どもたちも安心です。
- 湖西線に乗って大阪のテーマパークや遊園地に出かけることも。完全な田舎暮らしではないところがこのエリアの魅力です。
- これからは広い庭や家庭菜園やガーデンも楽しみたい。少しずつ季節のお花を植えています。

点ではなく面で暮らす安心感 集落がまるごと家族の居場所



上見浩基さん、ロビンさん
一般建築士 デザイナー&イラストレーター

三重県生まれの浩基さんは東京の大学に進学し、卒業後も専攻の職以外の他1年間のベトナム移住を経て三重県へ戻って独立。一方のロビンさんはアメリカンドラマから映画を学ぶために来日。京都に5年は住んでいた頃に浩基さんと出会い、三重を旅先の拠り所として移住先市町で農業生活をスタートさせる。2023年秋、より自然に溶け、暮らしを求めて北比良へ移住。

人と自然が変わる ひらいた場づくり



「今まで地域の人たちにお世話になりっぱなしなので、これからは自分たちができることで恩返ししていきたい。北比良に根ざして生きていきたいと思えます」と浩基さん。休みの日はふらっと海岸沿いを散歩するなど、家族で過ごす時間も大切にしています。

やわらかな風が吹くびわ湖のほとり、集落にたずむ古民家に暮らす上見さん一家。浩基さんは真、ロビンさんは浩基を頼りに住事していたこともあり、最初「一戸暮らしを始めたのは遠賀の石山でした。」「滋賀の瀬川のは三重京都のどちらからも近いという理由から、馴染みはなかったのですが、来てみたらびわ湖がきれいだったので好き五所所になりました(浩基さん)」「私は豊かな自然のなかで農務な暮らしがしたいと思っていて、石山に住んでみる頃から広い土地も物件を探していました(ロビンさん)」「そんな夫とひとつ転機になったのは、シガーが主催のモニターツアーに参加したこと。比良にリターンされた築家の森ん

によるガイドで湖周エリアを散策し、集落のどかな雰囲気と、びわ湖や比良山系先客にある美しいケリージョンに惹かれたという。そこから物件探しを始め、森さんが古民家を紹介してもらってトントン拍子に進んでいきました。「途中で持ち主が代わるなど軒余曲折はあったのですが、森さんと新しい転居人の友取りを始めてくださった方のおかげで無事に購入できました」と浩基さんが言うと、「サツと頷んで、いたものが手に入った感じがしてすごく嬉しかったですよ」とロビンさん。

移住し約1年。昔ながらの集落に暮らす大変さがなかったかを伺うと、「近所さんがすごくいい人ばかりで、人間関係に苦労したことはありません。むしろ集落の中に暮らしていることと娘を見守ってくれる目もお互いに助け合えるゆるやかな繋がりもある。点」で住んでいるのではなく、面」で住んでいる安心感があります(浩基さん)」。今、ロビンさんが求めている広い1000坪の敷地には畑を耕され、古民家はDIYなど手を動かさず、ペンションの中で。「まずはこの家をなして、自分たちのできる敷地に新しい拠り所を創りたいと思っています。古民家のリノベーションや新築の設計、移住の相談にも応えられたら、この広い敷地を活かして、人が集える場づくりをしたい。自分もいますが、交流が生まれ、集落に新しい人が入って交流が生まれ、地域の可能性もますます広がっています。



ロビンさんは農業シェアファームを借りて有機栽培を学びながら、自宅の庭でも畑ごと、広い敷地に草木を植え、小さな里山をつくるのが夢だそうです。また古民家のリノベーションは一般建築士の浩基さんがアイデアを練りつつ、DIYで少しずつ整えているところ。

住まいさがしのヒント

住みたいエリアに人脈をつくり、入居で紹介してもらおう方法がインテュアのように結局は王道かも。不動産屋さんで探すなら、湖国系ローカル物件を動かしている地元の会社へ。また時間の余裕があれば、まずは賃貸に住んでみて、地域の人の知り合ってから本格的に探す手もありますよ。

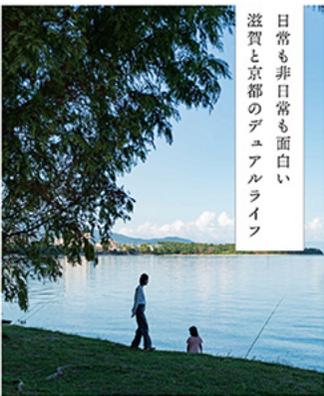
光川貴浩さん、貫山貴さん

ペンタポッド代表/編集長、デザイナー

夫ともに滋賀出身(貴浩さんは湖南市、貴さんは東近江市)、大学卒業後、京都へ。貴浩さんは仕事で東京に2年は住んでいたことも、結婚・妊娠をきっかけに滋賀へのリターン移住を考え、「びわ湖が見える・原近・古民家」という3つの条件で物件探しをスタート。約4年かけて理想の住まいを追い求め、2020年秋にびわ湖と湖田の景色が美しい今の場所と出会う。



日常も非日常も面白い 滋賀と京都のデュアルライフ



「水戸に住んでいる人はみんな大好き」という水戸湖岸緑地は、光川さん一家も頻りに入り、湖の水に懸れたり、移りゆく風景を眺めたり、ゆったりとくつろげる穴場スポットです。



京都で会社を経営する貴浩さんにとって、湖西は自分らしくリラックスできる場所。「湖西線に乗って京都から途中降車、びわ湖が見える国営後援部がスコーンと空になる感覚があります。旅でもびわ湖をポイント眺めていられるのが幸せですね」。



編集者として京都のクリエイティブ制作会社「ペンタポッド」を率いる貴浩さん、デザイナーとして働く貫山さん、お二人とも以前は仕事中心の生活だったそうですが、湖西に移住して日常色鮮やかに変わったといいます。

「物件探しをする中で、条件として考えていた古民家は、住宅ローンの組みにくさや実際に暮らすハードルを考えると私たちには厳しいことがわかってきました。そんな中でお出合った今の家は、私たちが主婦と同じ年の築40年、日本中どこでもありそうな中古住宅をリノベーションした(貫山さん)」「そして、この景色ですね。僕は滋賀のマチュピチュと呼んでいますが、湖田の上から眺めるとびわ湖まで見渡せて絶景なんです。湖西ってなんにもないような感覚に見えんですが、暮らそうを豊かにするためのアイデアや知恵もたくさんあるんですよ。すずきの土壁や石積み、DIYも、この地域に住まなければ、生かすことができないと思います。暮らしの人間に向き合う間が、やと(貫山さん)」「(貫山さん)仕事は世界中で埋められる情報をつかり捉え、見方を

変えて新たな価値を生み出すこと。オフィスがある京都と湖西の拠点を作り来るとき、編集者としての興味範囲ももっと広がったんです。

「現在関わっている京都市の空き家対策プロジェクトは、新築や老家のようなブランド化した住宅ではなく、この家のような古い家もされない中古住宅の価値を掘り起こしています。DIY然り暮らしを手行するプロが多いこのエリアにのみ出たおかげですね(貫山さん)」「一方の貫山さんは生け花をたしなみ、京都ではペンタポッドを聞いていましたが、今も住み始めても人が集まる広いテラススペースと花を飾るための床の間を確保しています。」「ここに住み始めても、自然の情報は多量に届けてくれて、初夏に負か咲いて秋には桜や彼岸花・季節ごとにとんどん変わるような様子は術中(刺繍的)で(貫山さん)」「もちろん自分の豊かさをだけでなく、比良おちと呼ばれる強風や虫の多さなどにも直面していますが、それを含めてわ湖と自然に近い暮らしに幸せを感じる」と、光川さん一家、暮らしと仕事、自然と都市、そのちょうどいい塩梅が湖西にはあるようです。

変化したよろこび

子どもたちはプールからびわ湖へ、移住してからより自然のアクティビティに興味を持つようになりました。今はiPhoneはマイクろ水発電機や自動ノコギリなどのDIYアイテムと、カナディアンソー。どこかに出かけるのもいいですが、ここでは毎日の暮らしの延長線上に非日常の楽しみがあります。

築約40年のレトロな昭和住宅を購入し、同じ湖西エリアに住む建築家ヘリペーションを依頼。もともと壁付だったところを大きな窓にしたことで、リビングからびわ湖と湖田が広がる開放的な空間に、近所通学の子供と主婦をDIYしたり、移住者仲間と石の石橋を自園したり、いろんな入りに暮き込まれながら家づくりを楽しんでいます。